



恋愛小景



後朝 「喪失感」

さつき

喪失感

ベッドの中で手をすっと伸ばすと、均整の取れた体に指が触れた。女はなるべく男の体に刺激を与えない様に気遣いながら、そろそろと手の置き所を探す。

「くすぐったい？」

男の顔を上目遣いで見やりながら聞くと、男の手がその手を包み込んだ。

「少しね」

ふ、と小さく笑うと、女は男の腕の中に滑り込む。

「私より敏感なんじゃないの？」

「くすぐったがりなだけだ」

「それを乗り越えたら、とても楽しい世界が待ち受けてると思うんだけど...」

「要りません」

きっぱりと否定をされて、男の腕の中で小さく肩を竦ませて、仕方ないか、と小さく呟いた。

薄暗いラブホテルの一室。脱いだ衣服や使用したタオルが雑駁にまとめられて床へ置かれている。ベッドの中の二人は裸身だ。女は右手の人差し指で自分の左手の薬指の根元を丸くなぞっている。はっきりとした指環の跡が残っていた。

「女って新しい恋愛をすると、前の男の人を忘れるっていうじゃない？」

「よく言うね」

「男の人はいつまでも昔の女を覚えているとも言うじゃない？
今居る女と同じように覚えているとも」

空いている右手で鼻の頭を掻きながら、男が頷いた。

「そうだな。男は弱い生き物だから」

「.....それじゃ、私は弱い生き物に近いのね」

女の頭を抱える男の左腕に力が籠る。

「女性が分かってくれない感覚の一つに、『軽い喪失感』ってのがあってね」

誰に言うでもない口調で、ぽつりと女が呟いた。

「愛しいが故に、だろ」

男の右手が、女の頭を梳るように動いている。

「そう。ちょっとでも距離が離れたら胸が軽く痛む、アレ。」

泣いたり喚いたりする程哀しくはなくて」

「つんと鼻の奥が痛むような痛み」

「そう」

女は枕に顔を埋めた。肩が小さく震えていた。

「.....我慢しなくてもいいのに」

「強がりなの知ってるでしょうに」

「わかってるけど、こんなとき位...」

「私に泣く権利はないから」

「...そうか」

女の腕が男の背中に回され、二人は強く抱き合った。

「好きよ」

「好きだよ」

誰に聞かれるでもない言葉なのに、二人の声のトーンは密やかだった。

数十分後。

「そろそろ時間ね」

「行こうか」

「ええ」

最初に体を起こしたのは女だった。互いにそそくさと身支度を始める。身支度を終えた頃、女の左手の薬指には石のない指環がはめられていた。

部屋を後にし、最寄の駅に向かって歩く。

「そう、それでさ」

「へえ」

友人同士で交わされるような会話をしながら、駅の構内へ。

「そっちの駅まで送った方がいい？」

改札をくぐった後、男が女にぽつんと聞いた。女は同じようにぽつんと答えた。

「それは...任せる」

「そうか」

無言で駅のホームまで歩みを進める。入り口前に並ぶと、先ほど聞いたときと同じように男がぽつんと呟いた。

「ぐずぐずになっても困るから、このまま帰るわ」

「私も、公衆の面前で泣きたくないからそれでいいよ」

女が言い終わったところで、電車がホームに入った。二人は無言で乗り込む。

一駅目。女が男の袖を掴んだ。二駅目。男が降りた。しばらく男の動きを目で追っていたが、女は自分の左手に目を落とした。三駅目。女が降りた。昂然と頭を上げて人の間を縫うように改札へ向かう。

改札を潜り抜けた女の視線が一人の男性に定まった。そこで一度立ち止まり、右手で左手薬指の指環をつるりと撫でた。そして、満面の笑顔で男性に駆け寄る。

「ごめんね！待った？」

「あれ、ちょっと印象……変わった？」

男性の手が女の頭に寄せられた。ぽんぽんと頭を優しく叩かれる。

「えへへー。ちょっとねえー。早くご飯食べよ？」

「うん、俺もおなかすいた」

「えへへー」

笑顔を浮かべる女に、男性は不思議そうな顔をした。

「随分今日ご機嫌だね。どうしたの？」

「ううん、何でもないよー。えへへー」

「変な子だなあ…。まあいいか」

するり、と女が男性の腕に腕を絡ませると、二人は歩き出した。その一瞬女目から笑みが消え、少し憂いの色を滲ませる。次に男性が女目を見つめた時には、その色はすっかり姿を消していた。

終了